塗り変わる隼人像

対朝廷悲劇の英雄→したたか都と交流

古代史を駆け抜けた南方の民、隼人。南九州に住み、大和政権に抵抗を続けたが、攻め滅ぼされ、服属させられた人たち――。8世紀の古事記や日本書紀には、そんな風に記されている。それに先立つ5～6世紀の古墳時代の「隼人の祖先」も、1960年代以降、同様の存在と見られてきた。しかし、最近の発掘によって、そのイメージは次第に書き換えられつつある。（宮代栄一）

鹿児島大で11月17日まで開催中の「発掘！鹿児島の古墳時代」展。並ぶ新資料の中で最も目を引くのが、先ごろ同県大崎町で見つかった、神領10号墳出土の人物埴輪だ。

高さ約20センチ。頭部しか残っていないが、眉庇付冑と呼ばれる冑をかぶった武人を表現したものだ。「時期は5世紀中頃。人を表現した埴輪としては、日本最古のものの一つです」と、発掘にあたった鹿児島大総合研究博物館助教授の橋本達也さん。

◎副葬品

これまでの考古学では、「南九州」は異民族が暮らす「畿内的な古墳文化を拒んだ地域」と考えられてきた。

根拠の一つが墓の種類が異なることだ。4世紀以降、近畿から全国に広がった前方後円墳が、宮崎平野など南九州ではごく限られた地域にしか築かれていない。代わりに、地面に堅穴を掘り、そこから横向きに死者を納める玄室を掘り込んだ「地下式横穴墓」が広範囲に分布する。

墓は氏族や民族の伝統が現れやすく考古学では文化の違いを見分ける指標とされる。畿内的要素を持つ前方後円墳とは違う地下式横穴は、「畿内的古墳文化を拒んだ隼人の祖先の墓」とされてきた。

ところがここ数年、南九州では、古墳時代の墓から、地元で作られたとは思えない遺物が次々と見つかっている。

中でも多いのが5世紀前半の焼き物「初期須恵器」。朝鮮半島発祥の陶器の一種で、畿内などで盛んに生産された。鉄器の素材になったと考えられる朝鮮半島製の板状の鉄塊なども見つかった。

鹿児島国際大教授の大西智和さんによれば、「地下式横穴墓からは、蛇行状鉄器など、畿内との関係が強いと考えられる鉄器類が出土することが多い」という。南九州の豪族を懐柔するため、畿内勢力が与えたものとみられる。

さらに注目されるのが、鹿児島県の東端、大隅半島の肝属平野だ。ここには武人埴輪が出土した神領10号墳をはじめ、全長140㍍の横瀬古墳など、4～5世紀にかけ、前方後円墳がいくつも築かれていることがわかった。また、神領10号墳や岡崎15号墳（鹿児島県鹿屋市）、生目7号墳（宮崎市）などでは、前方後円墳の地下に地下式横穴墓を築いたケースも確認された。

◎古人骨

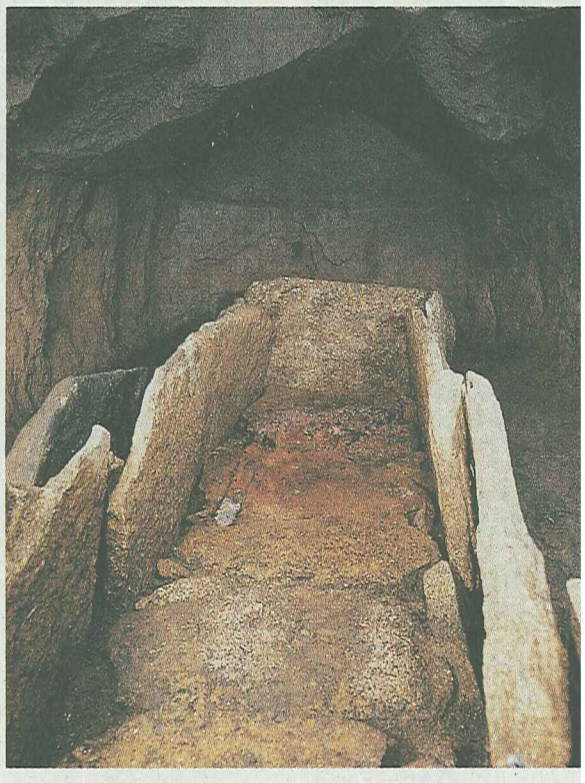
弥生系の畿内の人々に対を引くとも考えられてきた。しかし、南九州出土の古人骨の調査を続けている鹿児島女子短期大助教授の竹中正巳さんによれば、「色々な集団が入り交じっていたようで、一概には言えない。出土人骨だけをみる限り、南九州と他地域の人々を厳密に区別することは難しい」という。

鹿児島大総合研究博物館の橋本さんも「後に文献に、隼人として記されることになる南九州の文化の異質性は、むしろ古墳時代を経て形成されたものでは」と推測する。

最近の文献史では、「まつという8世紀的なイメージ自体が、先進地の中国の例にならい、畿内政権が「討伐される蛮夷」として位置づけたものと考えられている。

宮崎県立西都原考古博物館主査の東憲章さんは「隼人が畿内政権と対立していたという文献の構図を古墳時代に当てはめるのは、もう無理がある。にらみ合いつつも交流はあった、と考えるべきではないか」と、指摘する。

さらには、古事記や日本書紀が植え付けた南九州のイメージ自体が再考を迫られる可能性も出始めている。



㊤古墳の地下に作られていた横穴墓＝鹿児島県の岡崎18号墳で、鹿児島大総合研究博物館提供㊦鹿児島県神領10号墳から出土した人物埴輪